

## 海外の日本学研究の活性化を目指す国際提携事業の試み —中国で出版する『日本学研究叢書』の企画をめぐる—

張威

中国人民大学外国語学院

zhangweitsh@hotmail.com

### 1. はじめに

海外の国々で直面している日本学専門書が極めて不足している状況を緩和し、海外の日本学研究の活性化を図るために、中国では2010年から350名を上回る日本、中国ならびに欧米の一流研究者が執筆に参加する日本語版『日本学研究叢書』（全16巻）の出版プロジェクトを立ち上げた。多数の日本人研究者と海外の研究者の共同提携の下でこのプロジェクトは様々な困難を克服しながら進行している。本稿では、この史上最大規模の国際提携事業を取り上げ、この出版企画の背景、課題、趣旨、特徴、意義等を分析し、新しい時代ならではの学術的国際提携を紹介する。

### 2. 背景

#### 2.1 日本語教育の現状

日本国際交流基金2009年の調査結果によれば、全世界の日本語学習者数は3,651,232人、日本語教師数は49,803人（中国では日本語学習者数は827,171人、教師数は15,613人）。

日本語教育が高いレベルまで発展するようになると、日本研究と日本語教育を平行して行われることが要請されることになる。

#### 2.2 日本研究と日本語教育の連携が共通認識へ

世界の日本語教育学会のシトニ大会（2009年）、台湾大会（2010年）、天津大会（2011年）では3回連続で「日本研究と日本語教育の連携」や「日本研究と日本語教育のクロスロード」を課題とするパネルディスカッションを実施し、今後、日本語教育と連動して、日本研究を深めていくべきことは、世界各国の研究者の間で共通の認識に達している。

#### 2.3 海外の日本学研究の活性化で直面している諸問題

- 海外の日本学研究に目を向ける日本人研究者はまだ多くない。重視はされていない。
- 海外における日本学の人材養成に対する日本国内の学術支援の体制が確立されいない。
- 日本国内で出版された学術書と参考書は海外の研究者と学習者にとって、入手が非常に困難（値段が比較的高い、情報が分散している、流通上の問題などが原因になる？）。

- どうすれば日本語原文の学術指導書と大学院レベルの教科書が極めて不足している状況を改善できるかは、海外の日本学研究の進展とハイレベルの日本学人材養成を図る上で避けて通ることのできない最も重要な課題である。

## 2.4 中国の日本学研究および大学院教育の現状

- 中国では学部で日本語学科を開設する大学は 466 大学。大学院と大学院生の数が増加している（2011 年、日本言語文化専攻で博士号を授与できる大学は 10 大学→28 大学、修士号を授与できる大学は約 50 大学）。
- 研究レベルは少しずつ高まってきたが、優秀な学生は中心都市の名門大学に限られる。
- 多くの大学では日本語版の学術書が極めて少なく、学生たちによって読まれていない。
- 大学院向けの教材が整備されておらず、学術情報はきわめて不足している。
- 院生の専門的理論知識に偏りが多く、指導教官の資質と指導能力が不均衡であることにより、人材養成の質を保証することはできない。
- 研究者と学生が論文を書く時に、先行研究を的確に把握できない傾向が目立つ。（普遍的な問題）

## 2.5 課題

- 海外で日本語版の学術書不足の現実問題を有効に解決する方法はあるか。
- 海外の日本学研究に対する日本人研究者の理解と支援を受けるには、どうすればよいか。
- 海外の日本学研究の活性化を図り、ハイレベルの日本学人材養成を海外で実現することが果たして可能であろうか。

→海外のニーズに対応できる、海外の日本学研究の活性化に対して指導的役割を果たせる、海外ならではの特徴のある学術指導書を開発することが可能であろうか？

特色：日本語版、高水準、全方位、実用的、代表的（権威性）、普及しやすい、海外の研究者の研究成果と独創性を反映できる、…

→このような目標を達成するためには、一流の日本人研究者の全面的な協力なしでは実現することが当然不可能である。

## 3. 『日本学研究叢書』の企画について

### 3.1 中国で出版することのメリット

- 低コストと低価格を実現できるので、中国のみならず、海外での普及にも都合がよい。
- 国内の現状改善と国際貢献を同時にできるので、出版を引き受けてくれる出版社がある。
- 日本国内で出版されている学術書と性格を異にする学術書を企画することができる

- 中日両国の日本学研究者の間にはその他の国では見られない特別な感情と信頼感があり、提携協力が求めやすい。(→300名ほど参加)

### 3.2 多数の日本人研究者から協力が受けられる理由

- “大平学校”時代の恩師、日本留学の時の指導教官のリーダーシップと影響力
- 学会や共同研究など、長期にわたるお付き合いの中で知り合った日本学研究のパートナー
- 共通の認識と価値観に基づく有志集団のチームワーク
- 優れた資源の共同利用とウインウインの社会効果が得られる画期的な国際提携のやりがい

### 3.3 趣旨と内容

- 日本学(言語・文学・文化)各分野の伝統理論及び標準的かつ最新の学問的知識を、中国もしくは海外その他の国々に伝えるとともに、より深い理解とその共有を図る。
- 各研究分野の第一人者の先生方に当該分野の概説を執筆していただくとともに、最良の執筆者を紹介していただき、その原稿(2-3万字)を掲載することを目指す。巻末には専門家から推薦されるその分野に関わる参考論文や著書等の学術情報を提供する。
- 本叢書は中日両国に限らず欧米の一流研究者も参加する史上最大規模の日本学国際提携事業であり、様々な流派や異なる学術的見解を取る日本人研究者の学説を、そして国際的視野を取り入れた海外研究者の最新論考も加えて、公平・公正の原則下で統括的に反映し、各国で共有できる日本学の学術参考書と教科書として海外向けに発信する。
- 中国側編者の多くは、早い段階の日本留学組であり、日本や中国で日本の先生方から多くを学びながら、それぞれの研究を進めてきた者である。本叢書はこれら中国人研究者にとっては、40年にわたる日本に関わる研究交流の集大成でもある。その観点から、本叢書の刊行は、中日交流史の証しという点からも意義深いものとする。

## 4. おわりに

『日本学研究叢書』(外研社)は海外で直面している日本学研究指導書、参考書ならびに大学院生の教材の不足問題を緩和し、中国ならびに世界各国の日本学研究の活性化を図ろうとするものであり、既に300人を上回る一流の日本人研究者から深い理解と全面的な提携協力を受けている。この史上最大規模の国際提携事業が海外で企画され得ることは、日本学研究は日本国内から海外向けに発信し、そのグローバル化が進行しつつあることを象徴している。この『日本学研究叢書』(外研社)は、中国、日本、欧米の研究者たちのチームワークによって、きっとレベルの高い研究指導書として世に送られることを確信し、海外の日本学研究の活性化を推進する上で歴史的な役割を果たしていくであろう。

[張威先生紹介]

最終学歴 名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻博士後期課程修了

博士論文 『結果可能表現の研究－日本語・中国語対照研究の立場から－』（1996年、名古屋大学）

主要著書 『結果可能表現の研究－日本語・中国語対照研究の立場から－』（日本語研究叢書－Frontier series (10)）（1998年、くろしお出版）

その他、著書論文多数

北京第二外国語学院、名古屋大学、清華大学で歴任後、

現在は

- ・ 中国人民大学外国語学院教授、博士課程指導教官
- ・ 中国人民大学日本文学社会科学研究センター秘書長
- ・ 関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科客員教授